

一谷嫩軍記 第三回下 熊谷陣屋之段

後段文字純是實寫。直實是主。他皆是客。而連牽前段弥陀六來。緊相照應。毫無虧漏。直實陰計殺其子。以代敦盛事。在第二回。當時使讀者以為直實真殺敦盛。未嘗一筆露其為替身。而至此段。一直快寫語々。皆實著。真個驚心駭魄之文。然小松内府密謀宗清竊托其子及義經宥敦盛與重盛女結婚兩事。純用虛筆。此是實寫中有虛寫處。

重行定をいふはこころ須摩の月語々櫛出未段趣旨 平

前段冒頭一首國歌。後段亦是半隻俳歌。相配成趣妙。

直實般一子以救救威所以名為熊谷櫻是後文伏線

解讀與不解讀同然立脚一語罵殺當世

家ハハ島の浪少なきよひ。水却源氏ハ花の盛と見

野出中ノ勝まそ熊吾が陣所ハ須摩小一構要害

巖ノ逆茂木の中小若木の花盛ハ重九重い及

ひなき。暗藏取威小そまらあつぬり人とし熊吾櫻

とふぞうし花おらせトと此制札代讀で行人

讀ぬ人。一ツ所小立集り。おひ咲なかく。花おと思

ふふ此制札。以櫻花呼辨慶殿の筆志やげふ。おひ思

ふ下ツも讀ぬ。ふふ此ハの義經様お此花と惜ハ

枝をふ指一本切やよ法度出。故將第一回所叙縁由來避

掩本段脚色不露浪跡

憶子想夫四字說盡婦人心情

久客歸家平生不經意無用草木亦覺分外可親相換見家僕喜氣可

ア花のりりに指さるる首切下地こゝろ見ゆる

中、虎の尾踏心地をも、皆どけきと花ふ嵐の憶病

風。ちんくおこを孫色行。収却櫻花單留禁
拘以為本段結構こほくと尋

て爰へ熊苦ぐ妻の相摸い子と思ひ夫思ひの旅

姿陣屋の軒浅爰やかーこと尋ーが幕ふ覚のち

の紋嬉しや爰と内ふ入おきふの子堤の軍次立

出で。軍次本是沒緊要然間接作
用亦不可無這一流人物是つく真様か軍次そなふ

む息あふふふ。アめ下ふいぐ。熊谷殿や小次郎む

かばふふかむいふれ。憶子想
夫即是早ふ逢たい。透せて

抑亦此意

先門良人安否。次兒子
然後家僕。此是尋常問
訊。常套然。遙々千里。夙
夜憂慮。勿見家僕無恙。
知良人與兒子。並無恙。
是祝家僕。即所以祝良
人與兒子。焉得何等切
實。不是尋常家數。

兩婦人相見。彼一句。此
一句。寫出情景。兼至。

と、是相模語。且那ハ今日馬ウマ、藤フジ、奈ナ、小次郎コジロウ、孫マコハ、先以マ、今侍

前勤マヘて、下シタ、里サト、取ト、軍次イクサ不知シラ機ヲ、去イの馬ウマ、孫マコハ、芳ヨシと

お休やすみめと、挨拶あいさつとりぐなる所ところへ。敦盛トシノブ卿キミの侍侍、女メ、藤フジ

の局マカ、虎トラ口クチの籠かごと、道みち、北きた、手て、おけつおけつ、結むす、ひひ、花はな、のの

おお、直接直接前段前段の花陰花陰、隔へ、屋や、浅あ、めめ、ぐけぐけ、走は、付つ、初は、手て、のの、か

うう、者もの、うう、げげ、紙し、後のち、して、るる、つつ、紙し、と、けけ、つつ、をを、袴はかま、小こ、髻こむぎ

て、相あ、摸も、ハ、傍そば、へ、走は、走は、みみ、るる、に、足あ、らら、をを、生な、のの、影かげ、が、おお

ハ、藤フジの局マカ、根ね、下した、ハ、ふふ、いい、ふふ、是相模語、そそ、ふふ、いい、やや、ふふ、そそ、なな、ハ

相あ、摸も、おお、やや、ふふ、いい、ふふ、まま、久く、くく、やや、なな、つつ、らら、是藤局語、おお、床とこ、

千平成田一重 谷敷軍記 二十一

扱はや、是相摸語。両箇十分親熱瀧起下文帮助復讎と手、残取て、アこあ、と

伴ひ入、あ、い、い、袴、心、を、を、か、に、軍、次、ハ、結、手、

入、小、か、り、軍次承接相摸去不復用着他順手収去安頓後面待再借来時刻相摸ハ、や、う、て、手

を、作、う、へ、誠、小、一、昔、ハ、夢、と、申、大、肉、小、舌、座、遊、

を、時、勤、番、の、武、士、佐、竹、次、郎、殿、と、馴、初、語、所、を、抜、出、

東、へ、下、り、お、前、扱、の、お、身、の、上、代、承、い、ま、を、御、嫁、胎、

の、お、身、な、う、ら、平、家、此、法、家、門、参、謀、經、整、極、方、縁、

つ、ま、な、お、の、味、借相摸口中補出前事何等簡便其折ハ、世、盛、の、平、家、

漸、威、勢、ハ、ま、ま、と、か、げ、た、う、か、と、悦、ひ、申、了、小、此

藤局仕上皇生敷威相
摸亦仕在宮中窃與直
實通若正文叙去與處
安頓如此成文不音簡
便亦妙布置

此字猶云我親之必語
有少情致

不問他事先問其生子
暗藏敷感不幸見殺多
少哀痛在裏面

友源平のそとうひ屋一門をちまぐと、つ小付、不

此藤のち振へ。何とあ休まふ。とふ遊ばしなと。一

人苦ふ、てあかふ、とふ。作二層折一機嫌かお教と

えと。おりで、おや。嬉し。和二是相摸語。把慶喜二字一、そ

ふ。ともをるで、嬉し。懐胎うんぶで出やつ。時の子

へ、姫ごぜり男り、息覺いきさで育て居。かと、是藤局語。藤局先問相

摸子息安否相摸當從答之而作
者不叙其答語留為後面喫驚地
ちよつと奇くも女同士、問

つと、いま、年月小法ま体言の葉々り、一、嬉

一涙の種ぞか、藤の方狭ぐ、世の感衰なきへせひ

至此說出敗感悲其不幸反射相摸幸生子後文一轉以為死者反生以為幸者反不幸迴環宛轉妙甚。

相摸思科藤局安頓處置讀者亦以為敦感真死矣不測後面却是不然作者聯著人處不見痕跡

もなりや、其時小彦着したハ、無虫の太夫敦感連器
量發の拵ふと子と。今夜の軍ふ討死させ。夫ハハ
島の波小漂ひ、糸のみ縋るうきふんを、淺ま〜此
身の上と、かあらうとくおと理く、心前け所恩も
ま、連合ふも後うお、牙の片付、後世の夢お心任せ
小致し〜せう。故成頓住 以前佐竹次郎と申て、北
面同然の武士。只今よ、ハ武藏國の住人志の黨
の篠頭。然谷次郎直實と人おあつ、侍。誘揚賣弄自
とす〜と所盡の、アそあ〜の連合の佐竹次郎、今

是婦人本色

院宣二字暗謂敦盛是
上皇子直實受惠如此
而不能救敦盛可恨之
甚

前面評多事跡藤局既
已心裏耳底記得明白
不暇顧別人知與不知

で、熊吾次郎といふ。を、や、熊吾次郎
心、な、か、夫、よ、か。把敦盛為熊谷所殺。牢記在心。自然
と、吐、胸、の、氣、と、お、づ、か、何、と、相、摸、心、前、大、内、あ、て、ふ
發得此語有響不是忽然傳聞得來

系、頭、り、ま、佐、行、次、郎、と、徒、共、小、禁、獄、さ、せ、よ、の、院
宣、自、が、申、宥、め、御、所、の、門、夜、の、内、小、為、て、や
つ、く、を、覚、つ、て、相摸與直實情事為前後兩番寫出
前相摸自言後借藤局相對成趣

の、情、恩、何、の、忘、ま、せ、う、ぞ、い、ふ、く、其、恩、と、忘、れ、な
ば、助、太、刀、し、て、そ、ち、が、夫、熊、吾、と、自、ら、討、ち、て、た、と、
是、藤、局、語、を、よ、か、必、何、れ、か、恨、で、是相サ、ア、寂、前、の、咄、一

突然謂欲殺直實及相
撲驚問始能說出而前
後顛倒語無倫次急殺
忙殺寫來如見

小院の傍所のお胤。無官に大夫敦盛と。反覆鄭重説
得明白見帝

王之子非臣子可得
犯而離不可不報
そが夫然谷が討ふいの。是藤工

そりやあ誠てごぶまよを。是相りをなふい
模語

何ふかおふぬか。是藤サアとふくとよふ今うて今の
句語

物語すてとむ孫に誠しうらふ。追付夫が歸り次

第。拙多代尋ふ其間替くお扣へ下ふれと。又成一頓住
若一徑説下

不為 詞と直し理と直しおだむるお小表ふ。梶原平

次景高所用有て推参と呼い。教前面許多切迫模様
至此一隔断有横雲

断山、何梶原とや見付らまてい。お身の大い先く

直實祭墓即是小次郎
墓後文不說在骸及於
此處叙出

是景高駕弥陀六然亦
以見敦盛之死或是真
借來騎著讀者

こちくと、所墓の手と取一間へ伴ふ、其中小堀の
軍次立出、又借來軍次承接今日へ主人直實志有て、廟參仰
用あらば、某小仰置れ下されと、地小鼻付、まが平
次景高、何熊谷殿、他行とな、いふ來共、其石屋の
親仁め引立來とつと、答て科もあふ、白毫のか
た六を、平次か前小引居た、弥陀六此段是客借來收結敦盛ふま
くら、親仁め、情け者小頼也。敦盛が石塔ハ、建、
い。平家ハ、殊々ぞ、西海へおつらだし、あまゆきさね
子なけき、あまあま、あまあま、源氏方の二股武士ハ、あまあま

極口漫罵濶讀之似撲
陋野人不知忌諱者徐
尋其語脉計證敦感之
死以脫其生故成此呆
話宗清之所以為宗清
作者用意甚至

一。如。事。の。ハ。有。暗。指。直。實。サ。真。直。小。白。状。ひ。ら。び。
 偽。銘。の。熱。湯。背。骨。浅。子。つ。く。流。し。と。か。い。
 不。申。て。か。正。直。一。遍。も。扱。も。所。在。理。不。所。詮。系。生。程。
 申。通。石。塔。の。御。人。の。敦。感。の。幽。冥。把敦感断定為幽
鬼以翻出後面文
 守。五。五。ん。の。子。ハ。扱。置。一。五。ん。も。手。附。ハ。と。ら。ん。建。
 了。と。石。塔。の。喰。近。打譚語做兩層寫出簡傲
摸揀不是尋常老厭物 せ。て。人。魂。
 下。手。附。不。取。た。ら。小。桃。燈。の。に。致。し。せ。
 下。冥。途。ハ。去。出。し。ハ。や。ら。社。矣。本。の。是。が。そ。ん。志。
 中。知。深。い。る。や。う。也。ハ。上。野。以。此。功。徳。施。一。切。也。

景高在此處無甚大關
係至後面罵直實有貳
為宗清所狙擊一節借
以見宗清武藝雖老不
衰

只是十餘字把直實容
貌心情十分畫出何等
筆力

通りでびびりまゝ二層從幽鬼上捏造打と取ちめふ

と、六、何おつあやつてか、糠小釘と軍次か、訶小平

次ハ悪うゑ。大うな石塔伐建させたるも合点

く。應前面二熊谷戻らば、三、欵輪の詮義、先そやつり伐

引立来まこと、一間へ入る。ふ来共石屋此親仁とむ

と、やり小徹岸不屈状引立、奥へ連て行把弥陀六安著相摸

ハ障子押ひらるゝ日、早西小傾くさ、小夫の帰る此

延わとよく待間程、如く熊谷次郎直實、花櫻花在此盛櫻花在

應首の敷盛を討て、冬常代憎りひたひた、故為疑似語若断定為

段、敷敷盛至後面有許多

障手處如遊此說正好小猛此一句傷子血武士の物の表今知と今知思ひ

と胸小立歸此一句傷子血妻の相摸思ひと尻日小思ひ

下座小直科腕一語與胸裏軍次ハ思料語直相接好かて覆思ひ小ふ

り復借來軍次相承先達平次景高殿何う詮義の筋と

て、此石屋と引連出有與の一間小行と

委細を迷まぎたハ詮義とハ何るまくんアリや其

方ハ一執と僅ト梳原殿代餐申セア早くツけく

今何を程豫下候と呵らら何邊を能れくも相摸

小顔と見合ト心浅疎ト小公と

若直實自外入直
與相摸相見嫌其

景時不必費饗待此一
語特為排軍次去耳

戒不通書信元是武人
 常套語在直實不足為
 美只是直實欲以其子
 代敦盛之意早已決胸
 中矣其不許通書信
 亦以此不得為尋常套
 語看

無曲折不得不借軍次以遊藏之
 既已成一小折便驅將去正好
 乃見送うて熊吾ハ、ヲ女房其

方ハ爰へ何マも来た。國元出達マの為陣中へハ便

ハを用マと堅マハ付置マハ分マに。詞マハ背マくといマハ。新マ女

ハ亦マで陣中へ来マハ事マハ届マ玉マ極マの女マハと。不マ真マの

祐マハ。婦人最愛子直實殺子一節マ不呼マ和摸来悲傷一番不成此
 段文字然婦人無故在軍大碍事體著得此一語便有来歴 相摸ハ

まぢく、其マ何マと存マハ分マらぬマハ。かマうマと案マト

了マハ。小次郎マが初陣マ此是マ一里マいマらマらマ榻子マが志マまマう

り。五里来マハら便マハあマらマらマ七里步マ十里步マ百里

條マハ也マ是マ伐マハるマ者マ也マ。志マハ分マらんマハ。相摸語成兩層寫一層
 說武藏至守師是詳 登

不是寫相摸重義不發
其子直實而在焉小次
郎決無死敵之理假使
極口促死萬々無害是
相摸之所以放膽言不
顧其死

フ。で。つ。と。一。の。谷。と。や。ら。で。今。合。戦。中。と。取。り。ぬ。

号。ゆ。子。小。引。さ。れ。了。ハ。秋。の。因。果。了。簡。下。り。

お。せ。二。層。説。京。師。々。ア。は。小。次。郎。ハ。息。笑。で。居。ま。を。か。と。
至一谷是略

ふ。と。熊。吾。洞。と。あ。り。バ。戦。場。へ。赴。う。は。命。ハ。

ふ。と。抱。堅。固。を。尋。る。末。練。ふ。性。根。為。神。死。志。ふ。ら。何。と。

す。と。不。説。直。是。死。説。或。是。い。く。多。い。な。小。次。郎。が。初。陣。小。小。
死視托後面奥驚

ふ。と。大。將。と。引。組。で。討。死。で。か。致。し。た。ら。妹。し。い。ふ。で。

い。ふ。ん。志。ふ。と。夫。の。心。お。健。氣。不。詞。小。
過意必

無。顔。色。直。し。か。先。小。次。郎。が。手。柄。と。い。ふ。ハ。平。山。

聞負傷之言疑其或實
失口急問婦人愛子心
情活盡

直實揚言獲敵將
其明目張膽揚眉吐氣

の武者所と争ひ、殺ぐけれ高名、軍門小く入て

働とらみ疵きずかゝ、負おを共い。未代迄家の譽よめ。是直實語、志ち。

て、手疵て、急所いで、いいぢりぢりぢせぬぢり。是相摸語此

た手疵てと悔なむ顔付かほ、急所いなら悲い。是直實語

去い、何いのいふか、もう疵きずでも負お程ほどに働いハ、出いク

ふと思ふて、嫉やしみの餘ありか、尋た其時ときおあらも小次

郎らうと一所い所ところ、小出こなられど、急問い其相あ共い否や。危あやし

見みるらうと、軍門いくさ小くけ入い、小次郎ことむらい、小引こ立た、小

睨にらみんぶき、我陣屋わがへ連つ歸かり、二預よ某あハ、兵へい軍ぐん小こ擲な。

而亦隱然有傷子之情
見於言外讀者要見其
苦心焦慮處

直實意在購過其妻不
料為藤局所責問若一
直說可以慰藤局之心
而恐為景高所知大事
去矣左思右想摸樣畫
出來萬鈞筆力

手の大將無官の大夫敦盛は首取たがひ本告其子
負傷及此

獲敵敷張一番咄此一驚後不問かか法基

所我子比敵とふあふ疾然谷やらぬと後不錯

掴んでア歎呼難道咫尺有二箇婦人坐地不

入服裏至此便見若使藤局匿在內室何由得聞直實話説女房取付これく聊介ふさ

とふあひ藤の沙局様と聞て直實恟と

思ひがけふ對面と退敬ひを此を熊谷軍

のなういと年をむ行ぬ為武者と

いひ不取説上皇子只説其年
少可憐就衰威一邊説來約束

直實以景高來在內室
 窺其所為故把殺歎
 盛事逐一說來不是向
 前面藤局說及是向裏
 面景高說讀者不要誤
 認

おや相模助大乃志で夫と付せ此句挑撥相模生何と

くと刀追取せり付すく出後面許多文字返事も胸

小せりまればら直實殿敦盛様院の

亂と志りる心得て討志やん直説上

得犯是就行皇太子招子が有ふ其被討伐といふもせり

念此踟躕苦願寫得好涙はかりなく此度此戦被ひ歎と可

かそハ安徳天皇夫不随ふ平家の一門敦盛を相

置護彼と竊伐削小用捨故為硬評以文激かなら後文救命機事ふ

ナ藤北河方戦場の義ハ是悲事後文救命機事と、侍下り

看叙未有氣勢有骨力
不知者徒喜其音調流
暢可謂門外漢

庵、其日の軍に有増と、敦盛御代討き、平次某抱

語、んと座と捕此是序も去六日夜、早あの東雲と鳴る

此、一二代争ひ拔るも、平山、然、吾、討、取、と、切、て、出

た、平家の軍勢、先、把、平、軍、呼、謀、成、中、一、際、勝、き、一、緋

威點出、装束、さ、と、れ、す、山、あ、い、無、為、演、道、残、さ、と、て、出

出、そ、武、藝、點出、テ、健、氣、如、の、若、武、者、や、あ、る、敵、小、目、ふ、ら

け、そ、熊、谷、を、小、扣、へ、そ、り、返、せ、戻、せ、ら、い、と、扇、と

持、て、打、招、け、把第二回事再叙但彼止叙、事此從口裏說出語氣自別、駒の頭を立、直、し

波の打物に、打、三、打、以下、や、組、心、と、馬、上、ふ、か、ら、む

三人語間雜斷續如相
茶如相答如火如錦真
個絕世奇文

是說敦威是說小次郎
口裏說的是敦威心裏
說的是小次郎

ふづと組。兩馬が間ふづうと為。叙得好。是直實語。何と其

若武者伐組敷て、是藤。此が清顔をよく思ふれ

はく。黒くとはくまは細眉小年いづよふ系子の年で

い。前是遠望認得裝束。後是近接看得容貌。定めて二親まうさへん、是款い

う斗りと子と持ッき。舟の思ひに錦久上帯取て

立ち蒼あ打うららひひ早あ落おろろくと。是直實語。語未畢挿入相換

いめさ志やんはななかかをを心こ外そらら赤あななふふおお心こ下さへ

ふふつつふふ。是相ヲ、換語早あ落おろろくととそそむむ此ことと。複一語

一旦え敵て小組ぐ志しとと何な面め目めふふががららへへんん早あ首う

取上熊谷、是直首取といふかいかいの徳氣ふふと

いふふふふ。是藤局語。相模與藤サ其仰小、此蒙不用、句語氣各別意有所主、複語友好いと

於渡ハ胸ふせさ上し、は通小家子小次郎

款小組まで命や控ん、此句着力極重借我子說、公子即反借公子說我子あさ

さハ武士のなりひと、大刀を振舞に、迹去き

平山借来平山迫出列首、一節且收結平山後の山々静高く、熊苦こそ敦

威と組敷取ら助るハ、二心ふ極まると呼ハ

移ふ、是非もふや、仰置るハ、事あふハ、去傍へ泰

らせんと申上れ、は、泣と、うりり、あふハ、波濤

多少低徊多少踟躕句、可帶血言々、逆涙

所謂母即藤局然其實
是相摸吞吐鳴咽欲說
不說欲哭不哭一腔熱
血自肝腸中迸出來

一赴々心小かいた母人の泣く。本是慰藉相摸
反借藤局為對

頭さかふふふ雲井の空定時お女の中とい

ふい過行かふらん。みらいに迷ひを一つ。然るに

の言一言。是述取威語。是非お及ぶを首伐。賜一字說
不完把藤

局語故と吐そ中より藤の局。左程母を思ふふ
為隔斷

ら、経威殿の詞ふ付なげ都へ身と隠さぞ一の

谷へ向ひしぞ。把前事反
覆纏說 健氣およういふた。そ妹の

母も俱く悦んでそふか下やかしかついやふ。固

許其死今反傷其死非甘、
許之故不必痛傷至此 免悟の上も今さらふ。胸かせり

相撲勵聲說藤局以勿

斤平戎由

重 一谷嫩軍記

三十一

慟大是丈夫氣然不在
見丈夫氣及是反激後

把相摸思其子之念暫
且擱在一邊索性把取
感說得冷極牽至後面
哭子來一發哀痛冷熱
頓變主客換處奇想殆
自天外落來

悲しやとふとふと歎かせかふふと

共相摸ハ熊聲をげりて申は局換御一門殘

らぞハ島の浦へ落行りふ中ハ一人踏とらうと

討死ふと社と敷威振雖是赫其勇然不甚痛惜語數萬騎ハ勝と

高名但逃のび身と隠し人の笑ひと受りふと

まくの氣下ハ嬉しむ未練ふと早怯ふと若

理論之宜慰籍痛惜令用敷いさめ不能谷下かたかく陰

勸法反射後面翻痛其子伏後面以子代女房所基所此所ふと

教感不痛其死女房所基所此所ふと

ふふらぬ序時ハ早く何方ハも供せよ意謂不欲使藤局知

提出燈火便於後面見
影此處寫來絕不露痕
跡妙

青葉笛前段一主眼若
歸之寥落殊不成章法

斤平我曲

重

一谷歌軍記

三

替首之機密以見サテ 早くつけく我も敦盛此陣首突ツク 檢
 直實之不善思 備へん軍次ハ いかぬう軍次小 早参ハ 呼ハ る
 聲と法共ハ 一ハ 間へハ こそハ 轉成 換小 文片 法段 入相の鐘ハ 毎
 常の時と打陣屋 くハ 燈火ハ 小ハ 悲ハ 藤の
 方把 陣營 景ト 思ハ 出セ びんハ やハ 今ハ の際途
死 肌身ト 水ヲ 持キ 此青葉ハ 笛我ハ 亦
 亦ハ 石塔と連テ 兼ハ 償ハ 小ハ 迴把 前段 故表 其死 渡
 一置ハ 小ハ 笛ハ 我手ハ 小ハ 親子の縁魂 魄ハ 世
 小有ハ 母ハ 小ハ 親子の縁魂 魄ハ 世

如此叙去大有關係

一路都是往復問答至此借青葉笛洗得耳根凡此等結構上場看戲便知妙處

弄笛一節觀出後面哭子一段奇文

ふふかたのけ笛やい笛與子一并說肌下章法甚妙小舟身も添て

まるせぬ思ひやうせぬふ己申其笛ふふい所こころ怪

だらにふも。笛け音とふ向ふか直小違吾。敦盛松

けお静といふと思ふて遊ハせ是相摸語。弄笛慰魂使

從相摸發之者哉後文哭其子也ととくめふ出藤局意無害文理今必隨ハ孫の方涙ふおかを

ふいむ。ふふふふ吾ををすぬトげか。涙字顛字寫得親

ふの縁ハ纜ハあや障子ふうけうかげらふの姿ハ

惟敦盛師此處極力摸寫把敦盛為幽鬼蓋恐讀者未知作者絕大奇想孫の局ハ一目見了

うまハあつうの我子やとうけ寄らふと相摸

實方又是飄零一縉伸
與取感比擬恰好

婦人傷子自然有此等
光景

半信半疑尋思踟躕如
見水中之月鏡裏之花
只是朦朧模糊把索不
定

抱とめ。香の煙お姿と顯ハト。冥方ハ死で再び

都へ歸りしむ一念此ふをふ。をまひふハあら

祿共いふハハ。係子也。此一句言其或有之所謂或
有之以常理論則無之也作

者成模糊語示其或為幽鬼
又成隱約語曉其實非幽鬼
物子ハ一世と申せば何討

面遊ハさバ。姿を消失ん。是相ハふハ四十九日ハ
摸語

其間。魂宙字ハ迷ふと云。せか下分逢下一言成と。

是藤。局語。うりておし。障ふとらふと。時かへ。姿ハ

ふ。を緋威の鑑斗ぞ珍りけふ。もろと斗ふ孫の

方。お様も俱ふ取付て。扱ハ鑑のかげふ。不猶成鬼
語織線

是相模代藤局請見其
子首不知是自求見其
子首者來悲歡哀樂斷
為屬我不必是我定為
在彼不必是彼轉眼變
化翻手反覆可嘆可慨

之密 如此 戀一と迷ふ心うらむ姿と名づくかとい俱

あづけて正舛と泣くどくこぞ表あれた時刻極

と次郎直實首桶擡へ立出れ前文許多文字索性把取 威成幽鬼直接入首函二

字讀者全副精神注在 相摸ハ夫の袂と扣コ申是が親

子語一生涯お別とせめて首よを共ハ吟乞

と願ふ少ぞ孫の局も涙あぐら熊善そちも子

れ身であ此語應透入直實 肝腸筋骨皆顛聖山極歎と子

と悲すぬい物銭就此思を辨つて情小

一目見せてたもと継り歎うせる共ハ哀檢小

第一回叙義經授直實
以禁擄授岡部忠純以
歌箋暗寓意旨讀者不
曉是何意讀至此段逐
次明白忠純事在第四
回宜并讀以知作者苦
心

義經本知直實為人忠
貞可憑至此疑其所為
殊非人情不知作者欲
引義經來在裏面去繁
就簡所以不得不發此
一疑難

備へぬ中肉包の叶ぬと
不是恐悲痛反
是恐露破綻

所小、然、谷、背、く、敦、盛、の、首、持、参、る、及、び、ぞ、義、經、

是、小、て、見、ゆ、る、ぞ、と、一、間、と、つ、と、押、ひ、ら、る、

立、出、る、ゆ、大、將、義經出現處不須
另提用自述好

直實心情不著一語而精
神自出是以不寫寫法
思ひ考祿ハ女房ハ孫ハ局ハ法共

小、軒、外、か、う、に、平、伏、そ、義、經、席、小、著、か、い、
此句義經與直實及兩婦

人位置排列
不說自見
直實首實拾延引といひ、軍中、よ、て、略、浅、

願、ふ、汝、が、心、底、い、ふ、く、く、容、小、来、り、て、家、前、か、始、終、

の、指、子、ハ、真、少、不、同、
義經來在替裏又不
急と敦盛此首矣

如札之面猶曰外面陽
殺之陰救之此是義經
授直實密旨今以隱約
出之故也

捨せん。と仰と聞。よ。と。然。吾。は。も。つ。と。登。て。走。出。る。木
 此。橋。小。立。置。一。制。札。引。振。忍。げ。ふ。く。義。經。の。沸。前。小
 指。置。不獻呈函首先把禁桶示近者堀川の沸所少て六弥太
之多少意趣然有含蓄
 小。々。忠。度。此。陣。所。一。向。一。と。花。小。短。尺。是此然谷小
客
 ハ。敦。威。此。首。取。小。々。辨。度。秘。草。の。此。制。札。是則札
主
 の。面。此。ど。く。傳。達。小。住。セ。敦。威。此。首。付。取。き。う。伝。突。
 捨。下。さ。さ。く。と。想見色變聲顛肝腸崩裂蓋。と。取。つ。其。首。ハ。と。ふ
 け。奇。女。房。外。寄。下。息。此。根。と。か。把相摸暈絶昏倒 傳。基。ハ
 我。子。と。心。を。空。に。と。ま。ふ。ふ。と。首。と。覆。ひ。又成一頓挫
不說破妙

把相摸暈絶昏倒
省却許多牽纏

又成一頓挫
不說破妙

至此說得分明直實殺
子一節雖出作者虛構
使其徒顧思割愛殊乖
人情只有敦盛是上皇
胤子不可得犯之理然
後矯情忍痛大有不得
已者正能動人

或是直實謬歎一語不
是誇其聰明反是至痛

惜花與斬枝相呼應

申宥檢不備（後）ハお目ふうけるけ首おさハ

死（な）く然谷がけり（小）通（さ）む（小）ふ（小）う（小）。家（お）も（家）

去（お）悲（し）ハ（お）か（ら）く（小）碎（か）る（物）思（ひ）。未（省）得（替）身（痛）甚（し）
不知痛處摸様寫

得（次）郎直實謹（て）敦盛仰（ハ）院（此）御（胤）子（花）江南（此）

好（無）ハ（則）南面（の）嫩（說的明白決）子（伐）さ（ら）ば（一）子（と）

切（べ）ハ（花）小（準）ハ（制）札（の）面（本段開首櫻花禁搦）察（一）申（至是始應毫釐不差）

下（討）る（け）首（賢）意（小）叶（ひ）ハ（一）う（但）去（家）退（り）

う（傍）批（判）ハ（小）と（言）上（そ）者（曾不說殺其子以代之讀）義（經）欣（者心裏眼裏首得明白）

然（と）宥（檢）す（く）花（伐）惜（心）義（經）心（と）案（一）

千平戎白

重

一谷嫩軍記

三十四

不曰汝審視之曰示之
藤局又不是誇其報恩
反是慰藉語

哀痛悲愴一字一淚讀
芝木石亦應下淚

くも討たり。ふ能一字藏忍痛抑哀願思
思義許多心情在這裏面
敦盛小侍さふ死

其首由縁の人をもぞや。とせて名跡と惜せ

陽為敦盛母其實為小次郎と仰を聞よ。や女房敦盛は
母然不但其母并及其父

首孫の方へお目ふうけよ、アあいと斗女房ハ

不必說其蘇活單著
此語是此省文法
あへふ死首残子小取上、見ても涙

不ふさざりてか。つ子死顔至此始說吾子不
從直實說出先借

相摸透胸ハせ。る上。身もる。此持る首はゆ

くの残うふほくやう小思。れて、門出の妹小ふ

り返りふくと笑ふ。面赤く。る。思へ。可愛

把前事反覆説来不嫌絮煩

且泣且語音吐嗚咽慘不忍讀

さふびんさ把訣別瑣事點綴出来 聲さへ咽小つをらせで申

孫の方格、忠致を、敦盛様此首是相ヒヤ是は藤原模語

申、心は、かう、かう、遊ばして、お恨まふしふさし、お

首おやと、巻ちまて、おかりおさかて下り、おませし 不吉言、異言、好

頭トキ雖係隱語 申ひ首ハふ、私がお能たで、熊谷殿と、思ひ、亦是至痛語

逢こ嬢胎もおがら、お下り 把前話反覆丁寧以表思重 産落うしたはたの句

これ、何此敦盛様欲説不説、顯吞吐妙極 意節おまま、え、逢嬢胎、

被生おらし、そのお子が、お宮の太夫様、お方おらがらお

ふり、お持國と、傷で、十六年叙出年、兼叙契濶、是一句包著數十句音信、

通つうの主の返へつ。お役やく小こ立たふ。か因ゆゑ縁縁り。平へい藤藤局局語語對對せ。め

て。寂さび期期ハ。潔いさぎよう。死しふ。たか。と悌うやうやげ。是是對對直直實實語語。對對彼彼一一語語未未畢畢。

又又對對此此一一語語復復發發防防と。と。夫夫ハ。珍うつくか。せん。方方淚涙。前前と。忍忍。

れ。余余所所ふ。い。ふ。を。詞ことばふ。泣なみ音ね。血ち。淺あは吐つ。思おもひ。ぬ。り。不不。

痛いた哭なみ而而痛いた哭なみ之之。孫まごの。局局ハ。法はふ教きやう曇曇り。相あひ摸も。今いま此こゝ今いま迄まで我われ。

子こぞ。と。思おもひ。の。お。ふ。態かたち善よしの。情なさけ。そ。ぬ。ら。と。嗟なげ。や。怨うらみ。

う。ろ。か。か。い。た。ふ。と。を。哀あはれ。と。取と。ふ。此こゝ切き。ふ。

か。ふ。い。ふ。小こ詞ことば。お。恥はづ。しい。我われ。子こ。た。為な。ふ。ハ。命いのち。の。耽た。系けい。

い。と。ふ。成なり。合あ。せ。は。首くび。た。生な。世よ。の。中なか。通とほ。見み。ぬ。る。子こ。悔く。し。

相摸語半吞半吐不忍
明言其子代死恐隱事
發覺不利於藤局母子
藤局則直言不諱極道
其死義可傷不暇自顧
盖主客各成其義以見
兩婦人之賢

やと。不纏述死後哀痛及說生前不相見婦人心情描來便好俱小款くせうひーが是小

付いふ加しふを此淡れ石塔敦盛の幽ゆうれい冥みやうが建さ

せさとの呼とひひひまわり萩はぎせし青葉あおはれは笛ふえ石屋いしやの娘

が貫つらひー思おもふ小入こいり寂前しやくぜん生なま笛吹ふえふう時ときお新あたら際せま子こ

小こ穠なごりしふぢは性しやう小我こが子こと思おもひしふ詞ことばきりハ

さぞ消きえしハ此等疑惑不唯藤局相摸及陣裏有的一切不能解連讀者不能解急切要簡アいや

笛の音とす下りけ出し敦盛の幽ゆうれい冥みやう人目ひとめをい

とむか際せまふじし此面こゝふはげハ義經よしつねが志こころざしと輕々説出話ことば不な絮さ煩わづらひ

妙た平へい下げ座ざををささふふ也やをを不な悟さとふふががかか如ごと本もとののふ

義經猶指敦盛為亡鬼
是邊掩人目語然假幽
鬼打於前段索性寫至
此乃收煞不得不須此
一語

義經鼓勇一節後文無甚妙應不過把前面許多愴悽樣子為變調醒看者心目

景高發隱一節又漫甚要緊不過借來為呼出宗清引子

とを欠つて傷らる。又も淡く我かふ。藤局既聞兒不死意欲速見之然以直實殺子

代其死義不忍言最難著筆處妙著筆 抄新風小後ハ去テ耳と突ぬく悞

貝の音なまふまびびたたくく間ゆままだ。義経ハいいふふままくく

然谷たか若わかふふままもももももも螺かの音出陣の用意よういくくと仰おほ小

直ち交ま畏こりり急いまま一い間まふふ入いりり少すけけ玉たま。直實殺子救主一回話説了應以宗清話以照前段文字先把

景高来 為引子 取前とるる様子と軍居る梶原平次一間の内うち分

涌うりり出いでで来きああららんんと思おもひひしし故ゆにに屋や々々残のこりり系けいふふるる

とともも窺うふふ不た義経よしかね態たまま心こをを合あせせ敷し威いとと助たすけけららるる

鎌倉へ位進きんしんと言捨すけけ出いでで後のち分わるる了しと打うち

前面悲傷痛切。非不盡
文字之妙。而或病於繁
冗。忽挿入石下打譚言
語。變換面目。使看者不
厭倦。

不嫌把微時困難光景
逐節說出來。以見義經

了。手裏劔ハ骨伐貫く。鋼鉄の石鑿うんと斗不息

絶了。不脱石工妙。何者といふ中不立出る石屋代親仁

六。前方に於た不坐。こつを伐捨く上り。た。不

石工。相幽冥の事。海沢承り。つて先安堵與前段緊相呼應妙極。中

か。晦と立行と。ヤ待親仁。弥平兵衛宗清待と。此

始說出如。義経の祠不怖り。いつと思へど。分亦ぬ

雷轟電掣。顔。い。や。と。く。と。つ。け。も。不。い。香。新。の。里。不。隠。秘。の。不

い。白毫びやくごうの。な。ぶ。六。とい。か。男。で。ゑ。矣。宗清之去隱此盖先平氏亡數年因為鄰人所

知久矣下。誠まことや。諺ことわざふ。ま。至。て。悔くやみいと。然しかいと。嬉うれいと。

語不苟。

磊落氣象不是尋常貌
禱下第所以服宗清

前段說弥陀六眉間黑
痣為呼為白毫緣由不
知後段為使義經認為
宗清確證始應緊密何
等結構誰謂院本戲曲
不足為文章法哉

い。の。け。三。ツ。バ。人。間。一。生。忘。れ。ぬ。と。ら。ふ。借。俗。語。説
妙。不。費

解。昔。常。盤。の。懐。不。捨。之。伏。見。れ。里。少。て。雪。三。凍。一

と。汝。の。情。と。以。て。親。子。四。人。が。助。り。ま。し。嬉。し。い。所。に

時。ハ。我。身。三。木。な。ま。共。面。影。を。目。先。に。残。り。不。覺。を

眉。間。の。わ。く。ろ。く。應。首。隠。し。て。ま。う。く。と。糾。は。じ。ま。威

卒。去。の。後。ハ。け。樹。知。ぞ。と。吹。し。お。此。所。以。久。ハ。堅。固。下

居。と。不。満。足。や。と。ぞ。う。ら。ま。六。づ。ら。く。と。立。寄。義

經。の。顔。穴。の。わ。く。と。打。ぬ。か。め。反。射。義。經。幼。尚。認。宗。清。傲。眼。不

與。直。實。就。戰。一。様。テ。モ。醜。し。い。眼。力。者。や。よ。ふ。ア。老。子。ハ。生

文法相配為章法

屈精神盡此一句宗清談往

直實說戰。是說虛。宗清
談往。是吐實。文字相配。
用意相反。

本篇所寫婦人其最美
而節者義經之婦柳君
敷誠之配玉織郡君自
殺在第一回玉織見殺
在第二回蕙折蘭摧悲

さ。此。が。ら。ふ。さ。さ。く。莊。子。ハ。ニ。ツ。に。一。人。相。と。志
と。聞。一。が。か。く。弥。平。兵。衛。宗。清。と。見。ら。れ。上。を。

歌後語。本應曰既為汝所知為王、義經殿、時、ふ、ふ、と、不、道、
宗清不取妻應匿今唯說上半句、

さ。ど。ば。今。ふ。ふ。小。楯。籠。る。鉄。拐。が。峯。鶴。越。と。責。屋。を

大。將。ハ。有。ま。い。物。是。言。活。義。又。池。殿。と。言。合。セ。頼。朝。を

助。が。心。平。家。ハ。今。小。茶。心。物。是。言。活。頼。朝。ハ。宗。清。ハ。一。生、

か。ふ。美。是。小。付。て。も。小。松。殿。傳。信。終。の。お。う。ら。平

家。ハ。運。命。末。危。一。汝。武。門。と。道。れ。身。と。隠。一。一。門。ハ

初。吊。一。と。唐。土。育。玉。山。一。祠。堂。金。と。偽。り。三。千。兩。ハ

愴慘讀者酸鼻其文
工矣然不免寥落之甚
殆使全篇文字無生色
於是作者低徊俯仰出
一美人以補其缺陷即
此段所謂重威女代玉
織為敦感婦者門地人
品不下兩婦人此是作
者弄技繪畫

黄金と忘筐此姫君一人預り前段姐兒即是所給の里

へ身代退き平家の一門先立なき少少身代石碑

揚お一ッ團那智高野近國他國不建置一施之此知

ぬ石塔ハ皆是弥平寺宗清不淡の種と存存志

る前段首節說今度敦感此石塔詭不見下妹も

信幼少少不孫志申せ下故ハ疑ハ足免給共心

情ぬ風俗ハヤ変と忍不平家此信公遠不心誓

思ふふ若說意是敦感及不免捏造湊合說心給受合下不拍

命不ふふ或是平氏公子恰好不失當日事情心給受合下不拍

命不ふふ小次郎ハ不心ハ此為不此淡此

滿腔熱血迸出來不知
是墨是淚

若特恨賴朝兄弟忘再
生之恩不交求自己失
著是不過尋常亡國殘
黨何以為宗清何以為
烈士此等言語起宗清
於九泉聞其所言亦是
此等言語

石塔ハ敦盛比志少下を今分分宗清聞敦盛不死理當謝

其果放釋與否也及後面得鑑匣則意始解矣愈老愈辣狀如畫といふ天命歸をれぞ連

我助一頼朝義経以兩人の軍配小て平家の一門

海公達帶敦盛輩人在裏一時小亡ぶるとハハ是悲也如

運命や平家の為小獅子身中此虫責或怒く々自恨自かふ

或悔的は是不唯說平氏一族諸公の魂魄我と和盤托出兼說同僚諸人便好の魂魄我と

恨人淺兼說同僚諸人便好やと或ハ悔或々怒玉涙ハたろ籠たろとあら

そつり元来とと紀大将義経兼說同僚諸人便好く然る障子の内此

鏝櫃よらひのにこそふたへつと差へて次郎直實出陣の

出立と好む所の大あふめ。鍬於此兒代著し拘出

た。鑑櫃直實不必著甲今必說其著甲一以見御目通り不直

し置前打仗摸樣一以便於脫盛露顯方が大切。育る娘へ

鑑櫃届て。此夫見親暱之意弥陀六既已呼為宗清忽た

六と宜有此宗清の平家の余頼源氏此大

將疑問頼源是義經語面白是歇後語い。六り頼

りて進せ。娘へ忽成撲ふ相應ふ

下。此物ア内ハ何でぶらり批語改て見ませう

と。蓋押。吹まふ。敷感。おふつ。下。やと孫のおか

義經未始知重盛之女
與敦盛敦好如彼唐突
把鑑櫃為姐兒贈殊無
東歷作者未免疎漏然
不如此說去本段一望
慘怛嫌無濃厚處蓋出
不得已

只此一語致謝義經這
老剛硬性子寫得妙

是以子代敦盛敘事只
不過一兩語若縷述絲

け家かへ至此忍不住婦人聲口妙寫出蓋びつちやり、此内小ハ

何あもあいう、何も好いくホ、是でちつと虫が

納まうナ、直實直實、殿へ此後此後、礼を、此制セウ、礼レ、一一、枝

とト、らラ、ばバ、一子一子、浅切浅切、收結、禁楊、いといふ小、おお、様

ハ夫小、向向、小、糸子糸子、此死此死、なな、忠義忠義、とと、同同、心心、ハ小、ああ、ふ

ふふ、かか、てて、存存、ふふ、かか、ふふ、源平源平、とと、砂砂、まま、小、中中、どど、ふふ、小、てて、ま

あ。敦盛敦盛、様様、とと、小次郎小次郎、と取と取、うう、ハ、相模似代看、官發此疑問

冥前冥前、ハ吐吐、小、左左、通通、りり、有此語使不唐突、疑於湊合、手負手負、ハ偽偽、ハ、手理、小

小膝小膝、小、ひひ、つつ、むむ、ささ、と連と連、係係、つつ、ふふ、敦盛敦盛、修修、又平山又平山、と

千平戎日一

重

一谷嫩軍記

四十一

陳不見丈夫氣且前文
既說過了若更再述重
複可厭

借義經言一迫迫出直
實歸佛一節來

返ふはかか銭呼かぐとで。首祿ふはかか小次郎さ

知るるを。と尖^{まろど}叱^ひ。吐^は。不脱直實^{不脱直實}お撐^たりひせび入

エ、どうよく不能吾殿、こふ一人の子ういふ

逢ふくと楽しんで百里二百里ふを物と。^{與前文一}里或知消

息十里且知^{息十里且知}とつらりと涙もいりぞ首討たの々小次

郎さ志^しま^まさ^さる^る銭とま死^しど^どう^うに^に。志^しふ^ふ半^半か^かふ^ふが

ふかかぶふんすまいと。静と上泣ふがくこをを

理ふ志。^{與前文藤局悲}心^心を^を汲^汲で^で。帝^帝大^大將^將い^いさ^さみ^み銭^銭付^付け

んと、中能ある國出陣時福る用意いふと仰ふ

把前面許多剛硬模樣
如此放下。去真是豪傑
割銅截鐵氣象寫得筆
法斬絕妙像其人

脫下黑絲鑑來裏面是
白色衣。除卸鹿角兜去
裏面是這光頭異樣光
景異樣筆墨

直實恣（い）にぞら、先達（い）を願（い）ひ上（い）し、（い）の一件（い）かくは

通（い）と。境（い）と取（い）分（い）切（い）拂（い）ふた（い）ら（い）も（い）髪（い）を（い）お（い）は、直實（い）歸（い）佛（い）為（い）高（い）
（い）層（い）説（い）第（い）一（い）層（い）是（い）

剪（い）義（い）經（い）も感（い）心（い）有（い）、（い）さ（い）も（い）る（い）今（い）ん（い）そ（い）此（い）武（い）士（い）代（い）高（い）名（い）

譽（い）代（い）望（い）も、子（い）孫（い）も傳（い）へん（い）か（い）の（い）面（い）目（い）、そ（い）傳（い）ふ（い）辱（い）ふ（い）子（い）

と先（い）立（い）軍（い）小（い）立（い）ん（い）望（い）は、（い）又（い）是（い）駁（い）後（い）語（い）。若（い）説（い）不（い）欲（い）歸（い）尤（い）、（い）然（い）

谷（い）願（い）ふ（い）任（い）せ（い）晦（い）と（い）情（い）さ（い）そ（い）る（い）ぞ（い）。汝（い）堅（い）固（い）小（い）出（い）ふ（い）と

と（い）バ（い）。又（い）義（い）經（い）や（い）母（い）常（い）堅（い）け（い）回（い）向（い）も（い）教（い）む（い）と（い）あ（い）る（い）と（い）さ（い）

法（い）説（い）若（い）説（い）徒（い）以（い）傷（い）子（い）為（い）僧（い）乃（い）嫌（い）於（い）懦（い）今（い）、（い）有（い）が（い）た（い）と（い）立（い）上（い）り

上（い）首（い）を（い）引（い）け（い）ぎ（い）鐘（い）と（い）ぬ（い）げ（い）ハ（い）祭（い）衣（い）白（い）を（い）垢（い）、（い）第（い）二（い）層（い）相（い）

蓮生法名湊合得恰好

古今英雄暨子成敗得失年壽脩短何物非夢豈獨十六年哉

此一哭真是痛哭此一淚真是哀淚只此一旬勝他千萬言

摸是ハと取付と、何尋く女房大將の性情少て

軍半小歎ひの通り。何ゆとばかり、我が懐然吾

に向ふを西方弥陀の國、祇小次郎が秘しやふ

不九品蓮臺以勇猛脱離此戰陣一ッ蓮の縁成縁成、今

「先登與宗清語相應」系名も蓮生と改めん、一念弥陀佛、以滅を量

罪、十六の心も一むし、夢でふとふと、ふとふと

と、涙の度、於小屋初雪比日、うぶふと、け系風

情、此を、極力寫出眞實鐵心腸、至此一哭有千鈞力量、そふと、やく系子の飛際

消滅比、加勢、は、是と、不脱戰切、を、は、黒髮伺、ハ、なく、て

久坐無益是作者調侃
世作冗長沒緊要的又
字者且自贊本篇繁簡
得宜長短稱節

前段宗清冷眼看世冷
語罵人後段翻做熱肝
熱腸罵言忿激莫不至
寫冷處極其冷寫熱處
極其熱妙甚

大將藤の局不脱戰關字面諸共小言淡少をくれり

長居ハ益と弥陀六を鏡櫃ちやうぶと去んおやくと

ゆ小別案の志め分情景に義経殿を又敦盛兼叙

生返り、可ふ此強黨ちやうたうあり、思代仇おもひしろにて返り

い激射二將に辭報恩、たふを義経や。兄頼朝ちやうしやうが助

下激射怒と報しんひしをふとく。天運あまのついで決死恨と語心是義

心小言、跡ハ以熊公、浮世うきよ浅捨て不あきら忍志と。源平

家小由縁ゆかりハ分わり。可ふお分わり、小修羅しゆらを氏うぢ若患わがと

助すけふ、四向しやうの役やく。直實居間ちやうじつゐま以不なし、弥陀六やだろくハ分わり、又

斤平成由

重 一谷歌軍記

四二

老少男女名將勇士一齊收捨

宗清と心の還依。是宗清語我々心を是深小黒谷此法然

と師と頼み教へを徳心いふ内分ば。若少益い

師安泰是直お味か是直夫婦づと石屋ハ孫此お苟と

伴とよひ出さ陣屋の朝あさ縁ゆかりのま心こころと如同士命いのちにあ

らばと男同士口氣婦人有婦人口氣雙關收法男子有男子堅固たけな下暮くせのち上

意いふ大將自有をた涙なみだ名な此こゝ涙なみだ又また男おとこハ出

ふ小次郎こじろが首くび浅あ手て分わから所ところ大將たいしょう此こゝ須す磨ま寺てら小取

納なめな末すえ世よ末すえ代しろ敦盛あつなりとと名なハ折おぬぬここがが孫まご結むす

敦盛あつなり小次郎こじろ武藏むさし坊ぼくのの制せい札しやくハ花はな浅あ惜おしめめどど收あ結むす禁か花はなより

樹うゑ櫻い花はな

絶妙結束無二語罅漏

を惜む子と控武士を控谷夫妻收結熊をいふさく定めを

子有為いひ控ひ變ひ此世の中やとと收結藤局宗清并總結全段不為

實父子為主也 小見合を教と教五人齊見さらばく是男あさら

は是婦也教は涙ふうきくふりるく控てさくハ出

ては

一谷嫩軍記第三回終